

寺院での法要について

また開門するにあたりCOVID-19の集団感染ならびに発症は極めて危険なものであり、危機管理を皆様のご協力のもと寺院でも徹底していく次第です。それゆえ地方及びカナダ国の定めた規則と国際勧告に基づき細心の注意を徹底いたします。お寺にお越しになる際は、時間をかけて記載されているすべての注意事項と手順をご確認いただき、ご自身でも新しい規則を順守してください。

安全性に関わる重要な規定

法要参拝にあたり以下の注意事項をお読みください。

- 本堂への収容人数は10人以下となる。
- 法要参拝には事前予約が必要となる。
- 各参拝者(子どもを含む)は、健康状態を確認するアンケートに毎回(各法要)答える。
- 寺院にいる間は常に必ずマスクの着用、手の消毒、人との物理的距離を取る。
- 寺院は必ず各法要後に人が触る箇所等の消毒・清掃を徹底します。
- 手の届く個所に消毒液等を用意しているので各自ご利用ください。

以上の事項に従えない場合は、寺院への立ち入りをお断りさせていただくことがございます。また他の参拝者の安全性を考慮し退出をお願いすることがあります。何らかの理由で安全への規定を守ることが難しい場合は、ご自宅にてライブストリーミングで法要にご参加ください。

重要な変更事項

- 祥月法要の詳細につきましては寺院のスケジュールとウェブサイトをご参照ください。
- (開教使と開教使アシスタントを除く)本堂内での読経はご遠慮ください。黙読をお願い致します。
- 経本、御念珠、補聴器、門徒式章の貸し出しは行っておりません。
- お布施は指定された箱にお入れください。
- 法要後のお茶会は中止させていただきます。

たとえ寺院側で感染リスクの予防に注意を払っていたとしても、最終的には個人個人のリスクマネジメントが重要となっていきます。皆様のご協力とご理解のほどよろしくお願い申し上げます。ご質問やご意見のある方は寺院までお知らせください。皆様とお会いできるのをこころより楽しみにしております。

合掌

トロント仏教会 門徒総代会

以前ある寺院の先生から「幸せ」にたいして興味深い話を聞きました。

例えば、宝くじ。宝くじの購入者はみな自身のくじが当たってほしいと願うが、宝くじに当たること自体が幸せの直接的原因とはなりません。当たることによって多額のお金が入り、いままで我慢していたものを遠慮することなく手に入れることが出来る手段が増えるから幸せと感ずる。もしくは、その手段を通して自分や他人に喜びを与えられる方法が増えるから幸せと思うのかもしれない。しかし、お金というものは使い方を知らないが大変不便なものです。一歩間違えば、掴んだ（その人にとつての）幸せにお金で新たなトラブルを生み、不幸せを招き入れるかもしれない。

その先生からは、他にも私たちが幸せだと感ずる結婚や出世などいくつかのお話を聞かせていただきました。人によって幸せの定義はそれぞれであると言ってしまうまでもです。しかし、話を聞いて感じたのは、私たち人間の願う「幸せ」に普遍的なものも稀であり、どれも一時的なものであるかもしれないということです。それでも私たちは、この人生でより幸福度の高い幸せが手に入るように願ってやみません。

たまにですが、この「幸せ」をテーマに仏教の話をしてくれと中学校や高校から依頼がくるときがあります。そこで思い出すのが、ジョンレノンの逸話です。彼は幼少期に育ての親から「人生で最も大事なことは、それは幸せになることだ。」と教えられていたようです。そして小学校の授業で担任の先生から将来の夢について考えるようにとの宿題があ

り、生徒が一人ずつ発表したときのことでした。そこでジョンレノンは「将来は幸せになりたい」と答えたようです。するとそれを聞いた先生は「ジョン、あなたは質問の意図を理解してないようだ」と言いました。するとジョンレノンは「いいえ先生、あなたは人生というものを理解していないようだ。」と返答したそうです。

ジョンレノンは、幼少期のときから幸せについて考えており、育ての親からの幸せになつてほしいとの願いを真摯に受け止め、彼自身もその愛情に応えようとしたのではないのでしょうか。

私自身はそこまで幸せについて幼少期より熟考したことはありません。それでも家族からいただいた愛情というのは今でもここに残っています。私は三人兄弟の末っ子で両親と母方の祖父母と一緒に暮らしていました。両親は共働きであつたため、面倒をよくみてくれるのは祖父母であり、つねに味方でいてくれる存在でした。それは言葉ではなくとも私の幸せを願ってくれる姿そのものでした。

ある日、祖母が阿弥陀如来のことを「親様（おやさま）」と呼んでいることに気がついて疑問をなげかけたことになりました。祖母は「阿弥陀如来はつねに私たちのことを気にかけて見守って下さるみんなの親だからだよ。」と優しく教えてくださいました。

この記憶を思い出したのは、二年程前にバンクーバーへ出張で向かったときのことです。そこにはアメリカの先生もお

られ、二人の子どもを連れて来られていました。下の子はまだ三歳ぐらいで、私もお手伝いという形でおんぶなどをしてあやしていました。しかし十五分ぐらいが経つたころでしようか、私の腕も疲労が出てきて先生へ交代するようにお願いをしました。するとその先生から「大内くんが幼かったとき、親は疲れたからといって君を降ろしたりはしなかったと思うよ。」と一言いわれました。

たしかに親は自身の疲れを理由に我が子を見捨てたりはしません。そして常に我が子を気にかけてその幸せを願う存在そのものです。

次の日、その先生は法話のなかで「浄土真宗で大事なことは、願うことより、自分が既に願われていることに気が付くことです。」と述べました。

つまりは、私たち衆生が自身の幸せを願うより前に、阿弥陀如来は既に私たちへの普遍的な幸せを願っていたということなのです。

その仏さまの誓願は、私たちの後生の一大事を常に気にかけて、安心を与えてくれるおはたらきそのものです。

それはまるで生まれたばかりの赤子を「心配しなくていいよ。私はここにいますよ。」と優しい声で呼びかけ、暖かい腕の中に包んでくれる親のような存在なのかもしれません。だからこそ、そのような仏さまに親しみをこめて祖母らは阿弥陀如来の

ことを「おやさま」と呼び、合掌していただのだと思います。

その親様のお慈悲を「南阿弥陀仏」というお念仏を通して感ずるとき、私たちはただただその呼び声を頼りに合掌させていただきます。

「願うより前に願われていた。」自身の幸せ、他者の幸せ、それらを願うことに悪いことはありません。しかし、一歩下がって自分も願われている身であつたと気づき、ここに留めておくことは、いまこの世界中が右往左往するときに大変大事な心掛けだと思います。

2020年を乗り越え、2021年を皆様と迎えたことに感謝して、新年の御挨拶とさせていただきます。本年度もどうぞトロント仏教会をよろしくお願い申し上げます。

合掌

トロント仏教会駐在僧侶

大内祐真



今から約900年前にも同じようなことを言われていた人がいました。親鸞聖人の師でもある、法然上人（ほうねんしようにん）のお父様です。

法然上人の父は、美作国（みまさかのくに・今の岡山県）の兵を率いて領内の治安を守る役人でした。しかし、保延7年（1141）の春、かねてから仲の悪かった、この地の支配者の夜討ちに遭い、あえない最後を遂げたのです。武士たるもの、戦場で果てるならばいざ知らず、寝込みを襲われたのでは、痛恨の極みです。この時、法然上人は数え9才でした。幸いにも、物陰に隠れて難を逃れ、賊が去ってから瀕死の父の元へ駆け寄り、「私が必ず、父上の恨みをはらしてみせます」と敵討ちを誓ったのです。

しかし、父は、苦しい息の中から、こう言いました。

「決して犯人を恨んではならぬ。私に非業の死を遂げるのは、前世からの種まきの結果であり、因果応報（人の行いの善悪に応じて、必ずその報いが現れること）なのだ。もし、あなたが敵討ちをすれば、相手の子供が、またそなたを敵と狙うだろう。敵討ちが幾世代にも続いていく。愚かなことだ。父のことを思ってくれるなら、出家して自ら仏法を求めてくれ」

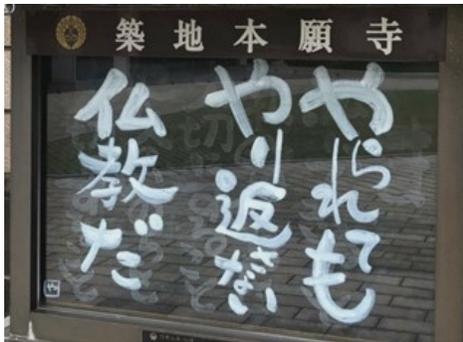
この父の遺言に従って、法然上人は出家をしました。

「ゴジヤパンでも放映されたドラマ「半沢直樹」の「やられたらやり返す。倍返しだ！」という言葉が記憶に新しいです。ののしられれば、ののしり返し、怒りには怒りで報い、打てば打ち返す。だが、それが悲劇のはじまりなのです。果てしのない報復の連鎖が始まります。自分の運命の全ては、過去自分のまいた種まきの結果と知らされれば今の現状を冷静にみて、光に向かって幸せのタネを蒔いていけるのではないのでしょうか。願わくば、お互いに幸せになれる道を進みたいものです。たとえ一時は苦しくとも。

合掌

カナダ開教区 総長

青木龍也



新年の挨拶
(おやま)

設我得仏 十方衆生 至心信樂 欲生我國 乃至十念 若不生者 不取正覺 唯除五逆 誹謗正法

（たとひわれ仏を得たらんに、十方の衆生、至心信樂して、わが国に生ぜんと欲ひて、乃至十念せん。もし生ぜずは、正覺を取らじ。ただ五逆と誹謗正法とをば除く。）

これは阿彌陀如来の四十八願の中で最も大事な第十八願の御文です。意識しますと、『たとえ私（法蔵菩薩）が、仏陀（真実に目覚めたもの）となりえたとしても、もし生きとし生ける全てのものが、ほんとうに（至心）疑いなく（信樂）私の国に生まれる事が出来るとおもって（欲生我國）、たとえわずか十遍でも私の名を称えながら（乃至十念）生きていくものを、もし私の世界に生まれさせる事が出来ない様なら（若不生者）、私は本当に目覚めたものと呼ばれる資格がない（不取正覺）のだ。』となります。

私たちが手を合わせている仏さまは、菩薩さまであったときに私たち衆生が西方浄土に生まれることが出来ないのあれば仏にはならないと誓われた阿彌陀如来です。私たちが極樂往生を願うより先に仏さまの方から先に私たちの方へ願いを込められていた、そう思うとなんとも嬉しく自然とこの手が合わさっていきます。

浄土真宗において、この阿彌陀如来の誓願が呼び声となつた「南無阿彌陀仏」に出会うことこそが、なによりの喜びだと味わっていただきませう。

さて、「新年明けましておめでとうございませう」二〇二〇年は、例年にも増して様々なニュースが飛び交い、そのニュースのほとんどが私たちの生活と深く関わるものでした。特にコロナウイルスはまだまだ油断できるものはなく、寺院も新たな取り組みと試行錯誤をしながら法要の私たちを変えて仏事をしていけるを得ませんでした。

しかし、そのような中でも多くのご門徒方のご理解とご協力のもと二〇二一年という新年を迎えたことに感謝し、皆様には深く御礼申し上げます。

二〇二一年を迎えるにあたって多くの人が新年の祈願や抱負を掲げていることかと思われまふ。その祈願や抱負で目につくのは「幸せ」という言葉です。抽象的な言葉ではありませんが、誰しもがそれを祈願し、それを目的として具体的な抱負などを掲げているのではないのでしょうか。

佛心

二〇二一年一月号

浄土真宗 本願寺派

トロント本願寺

年頭の辞

新しい年のはじめにあたり、ご挨拶申し上げます。

昨年は新型コロナウイルス感染症(COVID-19)が世界的に大流行し、多くの方が犠牲となられました。いまだその収束が見通せません。ここに、新型コロナウイルス感染症によりお亡くなりになられた方々に謹んで哀悼の意を表しますとともに、罹患されている皆さまに心よりお見舞い申し上げます。

感染の拡大を止め、私たちの命を守るためにさまざまな社会活動が制限される中、寺院活動も自由に行えない状況となりました。このような中で悩みや苦しみを抱えている方、孤独な状況に置かれている方も多くおられるのではないかと思います。

仏教を説かれたお釈迦様は、「物事は必ず何らかの原因があり条件があつて生じ、存在している」という存在に関する普遍的な原理を「縁起」として示されました。私たちは、自分一人で生きているわけではありません。周りのすべての方々とのつながりの中、お互いに支え合つて生活しています。日本では、自

分や周りの方、そして地域を感染拡大から守るために「新しい生活様式」の実践が呼びかけられています。新型コロナウイルス感染症が終息しない現状にあつて、この世界のありのままの姿である「縁起」の道理を深く心に留めたいと思います。

親鸞聖人は、お釈迦様の説かれたこの世界の真理をそのままに受け入れることができず、に悩み苦しむ私たちに、阿弥陀さまのおはたらきが届いていると明らかにされました。思つてもみなかった出来事に見舞われている世界ですが、阿弥陀さまのおはたらきを聞き、それを依りどころとして日々の生活を過ごしてまいりましょう。これからもお寺が皆さまの心の支えとなりますよう、お寺の活動にご理解とご協力を頂きますことをお願い申し上げます、年頭のご挨拶といたします。 2021年1月1日

浄土真宗本願寺派 門主

大谷 光淳



2021 年頭の辞

旧年中は大変お世話になりました。カナダ開教区を代表して、謹んで御礼と新春のお慶び申し上げます。

ワシントン州カナダ開教区に駐在頂いた宮川泰弘先生が2021年1月1日にご引退されます。宮川先生は35年間、カナダ各地にて法義の伝道に尽くされました。宮川先生の長年のご功績とご尽力に厚く御礼申し上げます。

カナダ各地において、新型コロナウイルスの拡散抑制における制限の生活が続きます。ウイルスは身体だけではなく、「心」にも大きく影響していることを感じる日々です。マスクをする・しない、ソーシャルディスタンスを守る・守らない、ニュースで映し出される毎日の争い・憎しみの姿です。

海外の仏教青年を対象とした研修会 (YBICSE) が二年に一度本願寺が主催して行われます。その研修中に、広島市の平和公園と原爆資料博物館を訪れます。私が引率した際に、資料館にあった広島市の原爆の式典で中学生の女の子が読んだ弔辞です。

恨みからは、恨みしか生まれません。

私たちは、この悲しみを、受けた傷を、相手にぶつけることで解決しようとしてはならない。

この子の祖父母は、原爆症で亡くなったそうです。がなかなか言えない言葉だと思えます。